宍粟郡船越山採集会記録

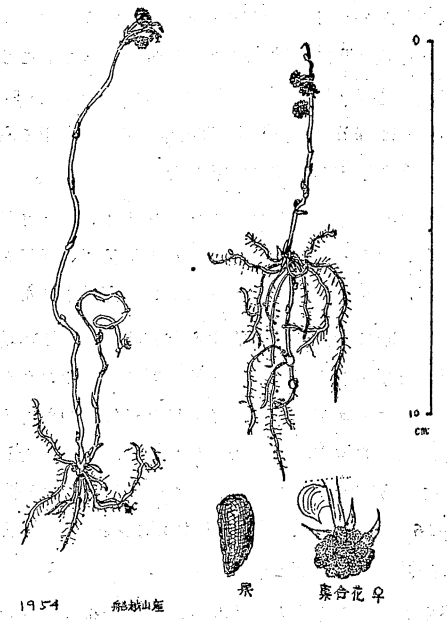
内海功一、建部惠潤

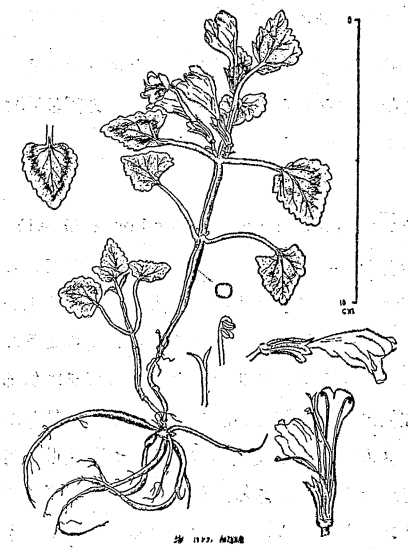
本年度夏の行事である採集会は29年8月19日（木曜日）12時、台風のためか不揃であつたが予定の時刻に開会、先ず室井先生によつて講師の農大奥谷先生（昆虫）の紹介があり、次いで井上三義（植物）、安藤保二（貝類）、豊田唯喜（県教委主事）諸先生が紹介された。講師の京大田川基二博士はまだ来られないので室井先生に万事お願いして奥の院へ向つて出発した。参加者は小、中、高校生を合せて約80名であつた。

門前の古いカヤの枝に群りつくムギランをみ、若芽のアオネカズラを採る。木馬道を登り、スギの大並木の中に入るとクサアジサイ、シギンカラマツが美しく咲いていて意慾の盛んな時のぎせい者となる。一方コウヤザサなどは平気でいる。少し登りモミ、カヤ、イヌガヤ、スギ、ヒノキ、ツガなどについて説明を受け、路上にかざすツリバナの実が採られる。赤い実のトチバニンジンが可愛らしい。休み堂の附近ではミヤマウズラが雑草の中に可憐な花を咲かせている。奥の院近くでは県下にここだけしか知られていないヨコグラノキが注目をあび、朱色の実を木ずえにつけている。勇敢な一人が木に登つて枝を曲げたので一同群り採つた。また一方草の中には実をつけたミヤマトベラもあつたが、なれぬ目には案外つきにくく、毎年の採集シーズンには採り残される。① カゴノキもある折れやすく登ると危険とのことでヨコグラノキと面白い比較となる。イヌシデ、アカシデの毛でまごつく。奥の院に到着、休けいの後裏山に入る。アキノギンリョウソウ、オオハクウンボク、ミヤマガマズミ、タムシバなどを採つた。森のなかを出て南に重々する山々の美しさに一時見とれた。帰路は登つて来た道を引返す者と本坊裏の森林をぬける者の2班に分れ、5時半頃本坊に帰つた。其の頃和歌山県から台風のなかを田川先生が直行してお出で下さつた。人員が定まらないので食事が8時頃になつた。

9時から夜の行事に入り、先ず田川先生から「羊歯類と蘚苔類の形態」の講演を聞く。藻類とコケ・シダの世代の比較、シダ類の無性世代の基本型の話からシダとコケの関係の深いことを話された。次に参考物として田川、建部両先生の「興味ある船越山植物解説」、稲田又男氏の「兵庫県イノデ類の検索表」、私の「船越山植物目録」を配布した。

8月20日、8時出発。今日は渓流にそつて登ることにした。参加者約90名。今日は田川先生の御指導でシダ類の採集が目立つ。タニイヌワラビ、イワヘゴ、オオクジヤクシダ、キジノオシダ、シケチシダ、サイコ





上図： **ウエマツソウ**（内海原図）
下図： **オチフジ**（内海原図）

註 ①珍種ヒメノヤガラもこの附近に産する。
②建部・内海：兵庫県宍粟郡船越山の羊歯植物、しだとこけ、No. 5（1954）

クイノデ、イノデモドキ、サカゲイノデなどが多く、チドリノキの実をつけたもの、ヤマブドウ、メグスリノキなどを採りながら県林業試験場試験地を過ぎて休けいする。ここでカンサイマユミの実をつけたものを採る。少々疲れ気味なので希望者だけ少し奥に入つたが、オチフジの春とはうつて変つた貧弱な夏の姿を草間に見た。10時頃帰路につく。イワヤシダが道端にあつたが急いで気がつかなかつたらしい。途中、池の谷に入つたが多くは疲れて採集する元気をうしなつたか、シダの宝庫に分け入つた者は少なかつた。ここで田川先生はイノデの類の珍しいものを採つていられた。本坊に帰ると、だれも採集物の整理に大童であつた。昼食後予定の1時に解散した。

今回の成果としてキヨズミコケシノブ、イヌイワガネソウ、マルバベニシダ、オオハナワラビ、イワシロイノデ、マンサク、ケマルバスミレが発見された。

なお、明日千種村へ採集する有志は、この後本坊下の杉林のなかを採集しアカメイノデ、タカオシケチシダ、ミヤマノコギリシダ、イヌワラビの変つたものなどを得た。船越山のシダは「しだとこけ」に報告したものに㉔今回新しく採集されたものを追加して総計106種6変種を算し、近畿地方有数のシダ類の豊庫として注目されることとなつた。

終りに講師の先生方、並にこの採集会を持たれた学会の先生方に深く感謝する。

（付記） さらに本夏8月30日にウエマツソウ、10月9日にホンゴウソウを採集したが普通の図鑑類に見られないオチフジ、ウエマツソウの図と解説とを追記する。

オチフジ (Meehania montis-koyae O wi) は、茎、葉ともに一見してシツバタツナミに似ている。葉の表面はビロードようで細毛が密布し、うす黒い紋がある。裏面は紅色で後にうすくなり、明りような油点がある。花はうす紫でラショウモンカズラに似るが、やや紅色がかつて美しい。草丈もやや短く軟らかで全体にカメムシようの臭気を有し、特に開花期にゼ附近にまでにおうほどである。花後地下茎が伸長していく点はラショウモンカズラと全く異る。根は太く多肉質である。花期はカキドウシと同期である。（建部追記）オチフジは採集者不明の高野山の標本によつて記載されたもので、大井博士は丈が低く、苞葉に長い柄があり、茎や葉柄に短毛があることから独立種とされたが後にラショウモンカズラの変種とされた。その後高野山から採集されず1949年5月広江美之助先生が雪彦山で地上部の標本を採集されたがまだその本態は明かにならなかつた。ところが昨年（1953）内海氏が船越山で地下部をそなえた完全な標本を採集され、綿密な観察をされた結果ラショウモンカズラと大きなちがいのあることが判明した。これは田村源先生が植物分類地理15巻46頁（1953）に精しく述べられている。私は今年5月30日雪彦山で花後の大きな群落を見たが、そのなかに立つとカメムシようの悪臭が感じられた。しかしその花や植物体は観賞に価する美しさを持つている。

ウエマツソウ (Sciaphila tosaensis Makino) は茎は無色、生時雄花、雌花ともに淡紫色である。雄花は極めてせん弱でしなやすい。ホンゴウソウヒの相異は雌花の心皮上に図のような突起を有すること、集合花及び果実が2倍近く大きいことである。船越山ではモミ、ツガ、スギ、ウラジロガシ、イヌガシ、シロダモ、ヤブニツケイ、ヨコグラノキの多い森林の床上の落葉や朽木の多いところに見られる。こうしたところに5～10 cm の本種を発見することはなかなか困難であり偶然に得たものである。（建部追記） 微少なホンゴウソウとウエマツソウが内海氏によつて船越山に発見されたことを喜び、氏の綿密な採集ぶりに深く敬意を表する。これが機会となつて明らかになつたことは両種とも兵庫県に新しいもので、従来、多紀郡福住村に知られていたホンゴウソウもウエマツソウの誤認であつた。また加東郡小野町のウエマツソウが京都大学標本室にあることも判つた。播磨植物目録に揖保郡香島村と多可郡比延庄村にホンゴウソウを記録し、前者については大上宇一氏も報告しているが、今確かめることはできないけれど、あるいはウエマツソウであるかも知れない。この記録に疑問を持ち、確実な標本に基づくと両種の兵庫県に於ける確実な産地は

ホンゴウツウ　宍粟郡船越山（内海功一氏）
ウエマツソウ　加東郡小野町（採集者不明）
　　多紀郡福住村（樋口繁一氏）
　　宍粟郡船越山（内海氏）

となる。また以上の標本は全部京大標本室に収められてある。以上は田川基二先生の御教示によるところが多く厚くお礼申上げる。